３．きらめく動物たちの命と海
【久保田信の白浜だより（その５）】

昨今、地球温暖化とあいまって南方系の生物たちが白浜沿岸にもしばしば出現するようになってきた。社会的問題ともされるのが、イシサンゴ類が主食のオニヒトデで、以前だと沖縄方面にいかないと遭遇できなかったサンゴ礁域に生息する種だが、驚くべきことに白浜沿岸でもかなり頻繁に見られるようになり、駆除の対象にまでなってしまった。まさに環境変化の証の１つである。

第５話　和歌山県南部海域で増えるオニヒトデ

連続した台風接近の影響から、2004 年８月 15 日に、北浜では珍しいオニヒトデの死骸を発見した。かなり傷んでいて腐臭がするほどだった。中心部の盤の大きさが約４cm ほどで、腕が 15 本あった。飼育下では、生後１年ほどで盤径が８cm に成長するとのことなので、この個体はごく若い個体である。キヒトデやアカヒトデなど普通のヒトデ類と違い、オニヒトデの腕の数は一定していないようだ。体の背面全体に針の山の様に生えている有毒な棘は鋭く、見るからに痛々しい。

（１）紀伊半島でのオニヒトデの出現

1970 年ごろから紀伊半島沿岸でもオニヒトデが多数出現した記録があり、串本町やすさみ町では 1000 個体以上が駆除されたという。1988 年以降は例外的な少数個体の捕獲記録を除き、オニヒトデの出現がぱったり途絶えていたが、最近、増加し始めている。田名瀬英朋さんが、南部町堺港で水揚げされる漁獲物から、色々なサイズのオニヒトデを次々と発見し、克明な記録を続けている。また、白浜町のダイビングサービス Miss Ocean のスタッフも白浜町沿岸で採取して実験所に届けて下さった。これらの一部は瀬戸臨海実験所水族館で飼育展示し、成長記録をつけている。興味のある方は来館してほしい。また、ごく最近、元職員の樫山嘉郎さんが富田浜の打ち上げ物の中から発見された。昨年にも盤が 10cm 余りの成体が北浜に打ち上がって、紀伊民報のニュースにもなった。

白浜町沿岸への過去のオニヒトデの出現について、1959 年から 1997 年までの記録を田名瀬英朋さんとともに南紀生物誌 39 巻にまとめた（田名瀬・久保田, 1997）。意外なことに、本州沿岸へのオニヒトデ出現記録は、白浜沖で初めてなされていた。比較的大形で、腕長 15cm の個体が、1959 年２月に、田辺湾沖の瀬戸ケ瀬でのエビ刺し網にかかった記録が、瀬戸臨海実験所元所長の内海冨士夫教授により報告されていた。その後の記録はそれから 15 年を経た 1974 年 11 月で、白浜沖でエビ刺し網操業中に捕れた１例である。翌年の 1975 年の夏から秋にかけて、塔島周辺で 26 個体が潜水採取された。水深 1.5m から直径 13cm と 15cm の２個体が佐々木賢太郎氏により、24 個体が田名瀬英朋さんによって発見

された。これらは、腕の先端から反対側の腕までの長さ（長径）が 4.5cm から 22.2cm までと、色々なサイズのものがいることがわかった。飼育下では２年で 20cm に達するとのことなので、冬越した個体もいたことになる。

（２）白浜で 22 年ぶりにオニヒトデ出現

1974 年以後は、オニヒトデの捕獲や発見例はずっとなかったが、1997 年７月３日、22 年ぶりに筆者が長径 22cm の越冬個体を発見した。この個体は、偶然、田辺湾入り口の塔島の岩礁で採取された。水深 3m 地点にある、小形のミドリイシの一種の上面全体に覆いかぶさっていた。本場の南西諸島での摂食行動は夜なのだが、今回は午後３時頃に見られた（田名瀬・久保田, 1997）。

オニヒトデは、田辺湾など和歌山県沿岸に、どこからどのようにやってくるのだろうか。それは、南方系のホシダカラガイと同じ仕組みによる。南西諸島などでオニヒトデの子供時代である浮遊性のビピンナリア幼生が誕生の後、黒潮に乗ってプランクトンとして運ばれて来る。１シーズンにオニヒトデ１個体の雌から生まれる幼生の数は、約 1000 万個と膨大な数なので、本場で生息数が多い時には和歌山県沿岸にも多数流れ寄り、環境さえ整えば越冬し、成長を続けていけるのである。

沖縄諸島以南の太平洋やインド洋の熱帯海域に広く分布するオニヒトデは、珊瑚礁の発達した沖縄島では、1970 年から 1983 年までの 14 年間に、なんと 1300 万個体が駆除された記録がある。この時期には、八重山諸島の石西礁湖でも大発生の記録が残っており、1982 年だけでも約 27 万個体を駆除したというすさまじさだ。2004 年８月 13 日付の紀伊民報で、串本海中公園センターによる生物調査の結果が掲載され、串本周辺海域では、「オニヒトデがいつ異常発生してもおかしくない状態で、温暖化の影響もあり、監視をかねた駆除活動の継続が必要」と心配する記事が掲載されていた。オニヒトデは、生態系の中で何らかの大事な役割を果たしているのだが、大量発生してしまうと厄介な生き物なので、やはり注意が必要だ。

オニヒトデの天敵はホラガイだが、ホラガイの生息数はそれほど多くなく、乱獲によってその数が減っている。このため、何らかの理由でオニヒトデが大発生してしまうと、圧倒されてしまう。田辺湾周辺では、ホラガイの仲間であるボウシュウボラやオオナルトボラがオニヒトデを食べていると思われるが、その数は激減している。

ヒトデ類は世界に 2000 種ほど知られているが、オニヒトデはたった１科１属２種の小

さな分類群である。最近、有毒の棘の生え方が異なるオニヒトデの近縁種も、紀伊半島沿岸のあちこちで、発見され続けているが、まだ個体数は多くないようだ。（つづく）

田名瀬英朋・久保田信. 1997.　２２年間の空白後に出現した和歌山県白浜のオニヒトデ（ヒトデ綱、ヒメヒトデ目）. 南紀生物, 39(2): 147-148.